

琉球大学学術リポジトリ

沖縄の子どもたちの生きるかたちと発達支援教育実践 ～多様な事例から学ぶこと～

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター 公開日: 2010-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山上, 雅子, Yamagami, Masako メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/17350

発達支援セミナー資料

平成21年8月22日(土)

沖縄の子どもたちの生きるかたちと発達支援教育実践

～多様な事例から学ぶこと～

まとめ 山上 雅子氏

(元京都女子大学教授、心理相談室ハタオリドリ)

ご紹介に預かりました山上です。フロアの方々からの意見もお聞きしたいので、できるだけ短い時間で話をさせていただこうと思っています。

私は京都の発達研究会の一員としてここでお話をさせていただきますが、京都の発達研究会というのは、実はいつ始まったのかも、誰も定かに覚えていないような研究会なのです。気がついてみたら結果的に私が最年長になっていました。主なメンバーが20代半ばから20代後半くらいの時期にスタートして、そのメンバーが現在60代に入っているような、そういう研究会です。その前は本を読んだりする勉強会もやっていたので、いつから発達研究会になったのかも、誰もよく覚えていません。

ただ何をしてきたかという、必ず一人の子どもについて考えよう、「一人の子どもと関わった人の、関わりの実践報告」を基にしてみんなで考えよう、ということをしてきたのが、研究会の現在まで続く特徴になっています。

最初の頃は、「目が見えるってどういうことだろう」、「手が動くってどういうことだろう」、「聞こえるってどういうことだろう」というようなことも含めて、障がいの重い寝たきりの子どもたちの発達を考えるとところからスタートしました。現在もなんらかのかたちで支援が必要な子どもたち、あるいは逆に健康にすくすく育っていくように見える子どもたちというのはどのようにして育っていくのかということを考えたりしています。また、発達していきにくさにもいろいろあるので、虐待など、環境的な要因で育ちの過程に厳しさを抱えている子どもたちの発達も考えたり、様々な発達の様相に目を向けて、具体的な事例を検討して現在にいたっています。

この研究会では、既成の発達理論とか特定の発達の視点とか、あるいは●○療法とか○●技法とかいう特定の発達支援の方法を大事にしているわけではありません。それらはちょっと横に置いておいて、

まずは一人の子どもが育っていく現実の姿に目を向けて、発達ということを考えてみよう、ということをお大切にしてきました。つまり、既成の理論や援助の枠組みは、それに乗っかって子どもをみると見えてくるものがあるけれども、また逆に見えなくなってしまうものもあると考えているからです。目の前の子どもをとりあえずしっかり見よう、誰かが関わったその関わりのなかで見えてきたものをみんなできえようというふうにして、年間10回の例会を、約30年以上続けてきたということです。結果的に、すごくたくさんの子どもの発達の様相に触れてきた研究会だと思っています。まだ延々と続いていますので、メンバーが年取って自然消滅するまで、続けるのだらうと思っています。

それだけ長い年月、発達を考えてきた研究会ですが、考えても考えても、発達ってよくわからないことが多いのです。そのなかで、発達の新しい視点とか、発達障がいの子どもの療育や教育の取り組みにおける実践の大事な視点というのは、いつも、一人の子どもとその子どもに関わる誰かとの、関わりのなかからしか見えてこないというふうになってきました。もちろん何十年も研究会を続けるなかで、研究会として積み上げてきたものというのはあるとは思いますが、しかし、メンバー一人一人の「発達」に関わる現場や立場はそれぞれに違うので、研究会の例会はいつも激論の場になり、結論を出すわけでもなく、激論のままで終わっています。教育現場の教員もいれば、就学前療育の保育士や心理士、一般の保育園の保育士や幼稚園の教師、言語聴覚士、発達の研究者、臨床心理士、福祉施設の職員等々、様々な現場で、人の発達に関わる人達が自分の視点を鍛える場として、この研究会は機能しているからです。ですから、職種によっても、関わっている子どもの年齢や障がいによっても、提供される発達の様相は異なってくるのです。結果的に、意見を同じくして

いる者はいないのが現実なのですが、そのことが、メンバーそれぞれの発達にかかわる姿勢を鍛えてきたのではないかと思います。そんな研究会なので、会を代表して意見を言うということはできないことをご了承ください。

ただ京都発達研究会から今回も沖縄のほうに参加させていただいたのは、京都の発達研究会では今、"沖縄から風が吹いてくる"とみんなが感じているからなのです。この"沖縄の風"に吹かれに行こうということで、今回は8名がこの場に参加させていただいています。昨夜も実践事例の検討会があり、今日も1日かけて沖縄の研究や実践の"かたち"に触れさせていただいて、沖縄の風の確かな手応え、からだにピシピシあたってくるような手ごたえを、全身で今感じているところです。そこで、"沖縄の風"に私たちが何を感じているのかということ、個人的な受け止め方ですけれども、ここで少しお話させていただきます。

私は1970年に児童相談所に就職しまして、その場所が滋賀県だったものですから、びわこ学園とか信楽学園とか、日本の障がいのある子どもの教育とか療育とか医療とかにおいて、先進的な役割を果たしていた地域で仕事を始めました。大津方式と呼ばれる乳幼児健診も全国に先駆けてスタートした地域です。しかし、私たちがその時代に、どうしたら障がいのある子どもの発達支援が実現するのか、発達することにおいて何が大事なのかと考え、それを行政の施策に繋ぎ、試行錯誤を続けながら作り上げたものは、時間が過ぎていくにつれて、より新しい次のステップに進むための礎石にはなっていないという現実は今ぶつかっています。つまり、古く歴史がある地域が、現在も先進的であるわけではありません。むしろある意味では、新たにこれから作っていく地域で、子どもや保護者、地域の要請や社会的資源を踏まえて、今必要とされていることを、新たに創り上げていく努力の中から、もっとも新しい発達支援のかたちが生まれているのではないかと思います。

今日の発表のなかでも、読谷村の宜保さんから貴重な発表がなされました。今、目の前にいるこの子どもと向き合ったときに、なにができるのか、どうしたらいいんだろう、また、どうしたらいいのかを考えるために、誰と一緒に考えたらいいのか、そして、出てきたアイデアをどういうかたちで、その子の育つ力に繋いでいくことができるのか、そういう地域の力を繋いでいく努力の中に、これまでにな

新しい発達支援の形が育っていくし、そういう努力からしか、子どもの育ちを支える地域というのは実現しないんだろうと思うのです。

また、そうした地域の個別の動きを受けとめながら、今、琉球大学の実践センターが果たしているセンター的機能も大事な要になっていると思います。その場を土俵にして、沖縄の各地から現場の先生たちが集まって、学部や院の学生たちと一緒に、実際に子どもに関わってみることで、発達って何だろう、教育ってなんだろうと考える努力が、具体的、実践的に始まっているんですね。そしてそれが3年経過したんです。そのことの意味はものすごく大きいと思います。

もちろんその経過のなかで、特別支援教育というのが始まりました。特にこの夏休みの期間は、全国挙げて、特別支援教育に関わるセミナーが花盛りで、いろんな所でいろんな講師によって特別支援教育はどうあるべきかが語られていると思います。確かに、「こういうことは大事だね」と言えるような、共有できるような教育スキルというのはあるのかもしれませんが。しかしそれらのスキルは、あるA先生とB君という個の関係のなかで、あるいはそのA先生とB君を囲むクラスのCという子ども集団のなかで、あるいはそのクラスの集団を支える学校という関係の網の目のなかで、そのスキルが、どのように生きたかたちで支援になっていくかということを考えずに杓子定規に適用されてしまうと、それは、子どもが生きて育っていく力には繋がらないんだと私たちは思ってきました。今日の発表も含めて、現場の先生たちが、自分の実践の現場、学校を少し離れて、自分の担任の子じゃないけども、新しい子どもに出会って、そしてこの子どもに私は何ができるかなあということ、手探りをして、目を開いて子どもをしっかりと見て、子どもの声を聞きとって、そして自分のあり方を工夫して、実践の質を高めていったところが、今日の実践発表のすごいところだと思います。

このようなことが体験できる場所は、そんなにはないですし、知識では人は動きません。大切なことが、その子どもとの関係のなかで生きて、その子の育っていく力になるためには、関わる先生方もまた、今日の発表の中で出てきたような、「合間」とか「間」という言葉で表現されたような関係の場の体験が必要なんじゃないでしょうか。つまり、先生たちも公園や校庭で、子どもたちと"出会う"機会が必要なんじゃないでしょうか。そうじゃないと、こういうこ

とをすることが正しいことだ、正しいことだからやるべきだというように、正しいことの枠のなかへ子どもたちも自分たちもはめ込むという、そういう特別支援になってしまう危険性があると思います。

これまでに何回かトータル支援の実践報告を聞かせていただきましたが、毎年毎年、お聞きするたびに、実践の中身が豊かになっていると思います。それでは、何が変わってきているのかと考えると、実践のなかで子どもたちはもちろん変わってきているんですが、それだけでなく、関わる側の先生たちが変わってきているんだなあと、感じています。先生たちの何が変わってきているかという、トータル支援の場は、子どもと向き合う中で、子どもから学んで、子どもをみる目が鍛えられる場になっているのだと思うんですね。先生方の子どもを見る目が、着実に変わってきている。それは、先生方がトータル支援に参加することで、確かな手ごたえを感じているということを感じさせるような発表のあり方に、その先生方の変化が表れているのです。

子どもとしっかり向き合うことで、子どもがはつきり見えてきた。子どもの方も先生たちが見えてきているようなのですが、先生たちも子どもが見えてきた。その見えてきたものが、発表するときはどういう視点で自分たちの実践を語るかという、発表の姿勢に生かされるような時期を迎えたのだと思います。

京都の研究会では、今もって一人の子どもの事例を通して、発達って何だろう、どんな支援がどんな育ちをもたらすんだろうと、議論を続けています。先ほど浦崎さんから基本的なトータル支援の考えが報告がされましたが、おおざっぱに言ってこうかなということをもとめて発表していただいたと思います。

それは、京都の研究会での基本姿勢でもあります。発達ということを考えるときに、赤ちゃんというのは、人の関係のなかに生まれ落ちるのであり、また人との関係のなかで育っていくのであって、そういう人との関係を抜きにして、言葉、あるいは認識、あるいは僕とか私という自己意識、そして、"人"というのはどういう気持ちをもった、どういう存在なのかという心の理解や心の交流も含めて、心理的な力の多様な発達は、育っていかないんだということだと思います。そのへんは共通項としておさえながら、一人ひとりの子どもの個別的な発達の姿を追いながら、「分らんなあ」というか、「どうしたらいいんだらうなあ」ということを今もって考え

ながら、現在にいたっているのが京都発達研究会の現状です。

琉大で始まった支援の取り組みのなかで、現場の先生たちが生き生きし、若い学生さんたちが子どもに出会って関わる楽しさ、喜びを感じ、関わりをなかで子どもたちが育っていくことを、京都から参加させていただくなかで、直に目の当たりにすることができました。また、琉大での試みは、読谷村の発表にあったように、約4万人近い人たちが生活を共にしている地域のなかへ根を下ろすなら、地域全体がトータル支援の場になっていくのだと、そういう確かな手ごたえを感じさせました。

今、沖縄が、日本中で最も新しいと私たちは思っています。今、目の前にいる子どもと向き合って、私たちが何ができるんだろうと、そういうことを行政とか保護者とか、子ども会とかが一緒になって考えることが、実は現実には難しくなっています。これは教育現場もそうだし、行政の現場もそうですが、「～ねばならない」という問題意識や、「～ねばならない」という課題だけはたくさんあるのですが、いっぱいいっぱいある課題をどういうふうに解決していくかが、見えにくくなっています。とりあえず一緒に集まって、こういうことあるよねってホワイトボードでも前にして、こういう問題ってあるよねって、自分のところでは何ができるかなって話し合うことができなくなっているんですね。"しんどい""難しい"だけがいっぱいあるのが、特別支援教育の今の全国の現状じゃないでしょうか。もちろん地域それぞれの特徴があると思いますが、「特別支援教育」という名前はできた、専門家として位置付けられたコーディネーターの先生もできた、地域によっては介護とか補助の先生の制度もできた、いろんなものができたんだけど、それがうまく機能しない、「どうしたらいいんや、どうしたらいいんや」と手探りしている、そして、親たちも「制度はできたけれど何も変わらないじゃないか」と感じる、そういう苦しい現実があちこちで聞かれていると思います。だからなのでしょうが、どうしたらいいという具体案、ハウツーが明確であるような教育や援助の技法が流行るようになっていきます。

昨日から2日間、沖縄の風に吹かれて、改めて目の前にいる子どもと向き合いながら、関係が育っていく実践に触れることができました。「関係」と言うと、関係論とか、難しくとられがちですが、人は人との関係の中で生きて、育って行くというのは当たり前のことなんですよ。

さっき楽屋で9カ月の赤ちゃんとお会いしましたが、お母さんに抱っこされてニコニコ愛嬌をふりまいてくれて、そばに行くとお手も差し伸べてくれました。でも、初対面のこちらが本当に抱っこしようとして手を出すと、ピューっと逃げて、お母さんにしがみついて人見知りをしました。言葉の力も、書いたり、読んだり、考えたりする力も、そうした人への深い依存、護られているという安心感、やり取りの経験を糧にして、関係を生きること抜きには、一人で身につけていくことはできないんです。なにかをやってみようという意欲とか、やってみて嬉しかったという思いや、自分がここにいるということの充実感、自分がここにいるということについての基本的な肯定感、アイデンティティみたいなものですかね、そういうものというのは、周りが本当に生き生きと生きていける、そういう関係のなかで育てていくのだということなんです。子どもは、いろんな弱さや個性を抱えながらも、それらが認められて、必要なところには支援の手が差し伸べられて、育てていくのだと思うのです。

トータル支援の沖縄のメンバーたちと、これまで何度かお話しているなかで、支援の形や支援のシステムについて、「沖縄は遅れている」という話がよく出てきました。そうじゃないと私たちは思っているんです。ですから、京都の発達研究会は何十年も延々とやってきましたけれど、わからないことだらけなので、沖縄の新しい風に吹かれに私たちはやってきたのです。そして2日間かけて、たくさんのものを持って帰ることができそうだと思っています。

今は特別支援の対象になる子どもたちが取り上げられていますけれども、そういう子どもたちだけが大事なのではありません。地域のなかには、他にももっともっと、育ちに絡む難しさを抱えた子どもたちがいます。たとえば不登校の子どもとか、虐待を受けている子どもとか、あるいは子育てに困難を抱える保護者とか、あるいはお年寄りもいると思います。自分も老年期にさしかかっていますが、どのようにして自分の人生を終えていくかという課題に向き合っているお年寄りたちもいると思うんですね。沖縄には、お年寄りが子どもたちに向き合って、自分がここにいるということを誇らしい、生き生きしたものとして体験している土壌がいっぱいあると思います。沖縄の豊かな伝統芸能は、その力を強く訴えてくるものの一つです。たとえば、石垣で発達相談をさせていただいたときに、子どもだけではない、「お年寄りが生き生きしている」ということが強く印

象に残りました。そういう意味で、特定のある子どもたちだけが特別な援助を必要としているから、そのために何ができるかを考えるというのではなくて、特別支援の対象になっている子どもたちのことを一つの要にして、その子たちと関わることで、子どもたちみんなも、大人も、高齢者も、地域で生活している人達みんなが、生き生きとしていける、そういう地域づくりというか、土地づくりをしていることが伝わってくるのが、「沖縄から吹く風」なのだと、そんなふうに思ってお聞きさせていただきました。

今後、琉大のセンターの実践が要になって沖縄全島へ、また全国へ、皆さんの実践を通した発信を届けてほしいと願っています。それから読谷村の実践っていうのは、特別なことじゃなくて当たり前のことなんだけれども、当たり前のことをするっていうことがどれだけの勇気と、人と人の連携、コーディネーターの役割をする役場の人たちの"心の力"がどれだけ大きいかということも改めて感じさせてくれました。その意味では当たり前のことが、形をとって実現していく、稀で貴重な実践として印象深く訴えてきます。読谷村を一つの地域モデルとしながら、みんなが生き生きできるようなそういう地域づくりが発展し、そのなかでより充実したかたちでのトータル支援の実践報告を、またお聞きできるようになるのをとても楽しみにしております。

拙い感想ですが、一日充実した実践報告をお聞きさせていただいて、本当にうれしかったです。どうもありがとうございました。

(文責：浦崎 武)